第11回 モーツァルト交響曲 全曲演奏会

2012年10月8日(月・祝)

◆開演◆ 14:30◆

―会 場―

ザ・ハーモニーホール/小ホール

(松本市音楽文化ホール)

主催:モーツァルト交響曲・全曲演奏会 実行委員会

後援:松本市・松本市教育委員会・塩尻市・塩尻市教育委員会・安曇野市・安曇野市教育委員会・(社)才能教育研究会
信濃毎日新聞社・SBC信越放送・NHK長野放送局・長野エフエム放送・(公財)八十二文化財団

よこしまかつと

若きモーツァルトがザルツブルグを捨ててウィーンでの音楽活動を始めた頃、とても素敵な出会いが彼を待っていました。第11回全曲演奏会では恋するモーツァルトについてス ポットを当てていきたいと思います。

【コンスタンツェ・・・一つの弁護】

コンスタンツェ・モーツァルトは、おそらく音楽史上もっとも人気のない女性だろう。過去百年間、あるいはそれ以上にもわたって、彼女が受けてきた攻撃はますます中傷が嵩じている。
セクシーな子猫で、浅薄、でモーツァルトに、決して自堕落とは言わぬまでも、落ち着きのない暮らしをさせた、などと言われてきた。このような攻撃は、大部分がドイツの音楽学者たちによるものだが、近年胸の悪くなるような悪意の極みに達している。どのようにして音楽学者たちは、こんな結論に達したのだろうか?無視できないような事実や記録があるというのだろうか?実は何もない。ではいったいどんな女性だったのだろうか?

1781年12月15日の父レーオポルト宛の手紙にモーツァルトはこう書いている。

『— ところで、ぼくの愛の対象は誰でしょう? — どうか驚かないでくださいね。 — まさかヴェーバー家の娘じゃないだろうね? — いやその通り、ヴェーバー家の娘なんですよ。 — でも、ヨゼーファでも — ゾフィーでもなくて — コンスタンツェ、まん中の娘です。
— 略 — ああ、最愛のお父さん、ぼくら二人に起こったあの家での出来事をすべてお話しようとしたら、何枚かの便箋にびっちり書きつづることができますよ。御希望なら、次の手紙に書きましょう。 — でも、こんなお喋りからあなたを解放してあげる前に、ぼくの最愛のコンスタンツェの特徴をもっと詳しくお知らせしなくてはなりません 。— 彼女はブスではありませんが、けっして美人とは言えません。— およそ彼女の美しさは、その小さな黒い瞳と、すらりとした体つきにあります。 機知はありませんが、妻として、母親としての務めを果たせるだけの常識は充分に備えています。彼女に浪費癖などありません。それは真っ赤な嘘です。 — 略 —
こんなわけで、いまぼくが望むのは、少しでも確実な収入を得たいということしかありません。(ありがたいことに、その見込みは現実にあります。) そうなったら、ぼくはなんとしても、あのかわいそう な人を救い出すことを認めていただき — そしてぼくと同時に彼女が、— いうなればぼくら みんなが仕合わせになれるよう、あなたにお願いするつもりです。— だって、ぼくが仕合わせになれたら、あなたも仕合わせになるわけでしょう?
— 定収入が得られたら、その半分はどうぞお使いください、最愛のお父さん —』

【結　婚】

父親 レーポルトはコンスタンツェとの結婚に猛反対していたことは有名な話だが、結局モーツァルトに押し切られた形になった。父親の反対ぶりと結婚式の様子をモーツァルトは手紙に残している。 1782年8月7日の手紙から

『― そこでぼくはあなたの同意をまったく当てにしていたのです！― そこで、郵便を二回むなしく待ちましたが、ご返事をいただけませんでした。そして結婚の日取りは（それまでにはきっとすべてが分かるだろうと考えて）もう決まっていました。― あなたの同意が得られると確信し、心慰められて、ぼくは神の御名のもとに愛するひとと結婚したわけです。その翌日、二通のお手紙を同時に受け取りましたが、―もう、あとの祭りです!　― 略 ―　結婚式には、彼女の母親と末の娘 ― それに双方の後見人であり立会人であるフォン・トールヴァルト氏 ― 花嫁の介添人（郡長）のフォン・ツェット氏 ― そしてぼくの介添人のギロフスキーの他は、誰も出席しませんでした。 ― ぼくらふたりが結ばれたとき、妻もぼくも、ともに泣き出してしまいました。― 出席者はみんな、司祭さんまでがそれに感動して、涙を流しました。― 二人の感動を目の当たりにしたからです。』

結婚後のモーツァルトとコンスタンツェの様子をニーメチェクはこう書き残している。

「モーツァルトはコンスタンツェ・ヴェーバーとの結婚では幸せだった。コンスタンツェは彼のどんな気分にでも一緒に浸れることのできる、気立てのよい、愛すべき妻だとモーツァルトは思った。そのため、彼女は夫の全面的な信頼を得ることができたし、彼に対して大きな影響力を持つこともできた。 ―略―　彼はとてもコンスタンツェを愛し、わずかな罪まで何でも打ち明けた―」

もう一つモーツァルトがコンスタンツェに残した手紙をここで紹介しよう。

『おはよう、かわいい女房さん！ きみがよく眠り、なんにも煩わされず、あまり突然起きたりせず、風邪をひかず、身をかがめたり、そらしたりしないで、小間使いに腹を立てず、戸口の敷居でつまづいたりしないことを祈るよ。
ぼくが戻るまで、家事の心配はしなくていい。とにかく、きみに何事も起きないよう！
ぼくは一　時（じき）に戻るよ。』

この頃のモーツァルトの習慣についてニッセンは次のように語っている。

モーツァルトの起床は五時で、コンスタンツェが病気であったり、気分が優れないときには、一人で馬の遠乗りに出かけるのであった。彼はいつも紙切れに一筆したため、それを妻のベットに残していた。

モーツァルトが結婚した後の何ヶ月間の手紙は、帰郷の約束にあふれている。
父親、姉、友人たちに、花嫁を紹介するというのである。しかし旅行を延期するための言い訳も繰り返された。なぜならモーツァルトには、父親と姉がどちらも妻の選択に不賛成であることが痛いほどわかっていたばかりでなく、大司教の宮廷の職を辞めたため、ザルツブルグに行くと強制的に拘留される恐れがあったからである。父親がその心配はないと請け負ったため、ヴォルフガングとコンスタンツェはついにウィーンを出発。
1783年7月の終り頃にザルツブルグに到着し、10月の終りまで滞在した。このザルツブルグ訪問については、記録が驚くほどわずかしか残されていない。
この訪問はすべての関係者にとって厄介なものだったに違いあるまい。

●交響曲　第36番　ハ長調　Sinfonie in C　KV425
(27歳　1783年10月末～11月初め　リンツで作曲)
Adagio - Allegro spiritoso, Andante, Menuetto - Trio, Presto

ザルツブルグからウィーンへの帰途、夫婦はリンツの町を通過しなければならなかった。
この町で起きたことについては10月31日付の父親宛の手紙に詳しく書かれている。（第5回全曲演奏会プログラムノート参照）……『翌日、ぼくらがリンツの門に着くと、一人の従僕がすでに待っていて、老伯爵のところへ送り届けてくれました。そこでいま、ぼくらは泊っているというわけです。この家でぼくらがどんなに歓迎されているか、とてもお伝えできないほどです。十一月四日、火曜日、ぼくはここの劇場で演奏会を開きます。そしてぼくは一曲もシンフォニーを持参していないので、大至急新しい曲を書きます。その日までに完成しなくてはなりません。さて終りにしないといけません。もちろん仕事をしなくてはならないので。』

モーツァルトの言葉を信用してよければ、10月30日から11月4日の間に、彼は新しいシンフォニーを作曲し、パート譜に写譜し（あるいは誰かに写譜させ）、初演前に1回リハーサルを行いさえしたということになる。コンサートはリンツの舞踏会場の大広間で行われた。

【ハイドンの精神、ベートーヴェンへの影響】

アダージョの冒頭で気高い二重付点ののリズムが鳴り響いた瞬間、聴き手はモーツァルト晩年の傑作がもつ音楽の世界に、たちまち入り込んでしまう。
スケールの大きな第一楽章は完璧に均衡のとれた形式をもち、オーケストレーションの技巧を尽くしており、急いで作曲されたという様子を微塵も見せない。1783年当時に《リンツ》と比較できるシンフォニーを作曲できる能力をもっていた他の作曲家は、ひとりヨーゼフ・ハイドンだけであった。何人かの研究者は、この作品全体にハイドンの精神が漂っていると指摘している。
ベートーヴェンやシューベルトの最初期シンフォニーの上に歴然とハイドンの精神が漂っているとすれば、それらの作品は、モーツァルトのシンフォニーのなんらかの面からも影響を受けていたと証明できる。例えば、ベートーヴェンは明らかに、KV425の緩やかな序奏を、1795年に作曲したハ長調シンフォニーの序奏の手本とした。このシンフォニーは未完成に終ったが、同じハ長調をとる第一シンフォニーのための練習台として役立った。アンダンテもベートーヴェンに影響を与えた可能性がある。ベートーヴェンが第一シンフォニーのアンダンテ楽章に、同じ調性、同じ手法でトランペットとティンパニを使おうと決心したとき、モーツァルトのこの楽章のもつ効果に注目したことは確かである。

●ピアノ五重奏曲　変ホ長調　Quintett für Klavier. Oboe. Klarinette. Horn und Fagott in Es　KV452

（28歳　1784年3月21日以前、ウィーンで作曲〔自作品目録には3月30日と記入〕）
Largo - Allegro moderato, Larghetto, Allegretto

モーツァルトが挑んだもっとも困難な課題は、ピアノと4つの管楽器のための《五重奏曲》であったが、彼はそこできらめくばかりの偉業を成し遂げた。それぞれの管楽器を1組ずつで扱うのとは異なり、1本ずつの管楽器のために書くときに伴う新たな困難をモーツァルトは特に意識し、1784年4月10日付の父親宛の手紙の中で、この点を強調している。

『僕は……ある五重奏曲を作曲しましたが、それは大いなる称賛を巻き起こしました。―ぼく自身いまでも、これまでに書いたもののうちで最高だと思っています。……あなたに聴いてもらえたらなあ！ ― それに、演奏がまたどんなにすばらしかったことか！ ― でも（実を言うと）、ぼく、弾きっ放しだったんで ― 最後には疲れてしまいましたよ。― そして、聴衆が決して疲れなかったことが、ぼくにとっては少なからず名誉です。……』

我々の知り得るかぎり、この作品はこれまでに書かれたピアノと管楽器のための五重奏曲の最初のものであり、ここでなされたモーツァルトの偉業は注目すべきものである。

●交響曲　第14番　イ長調　Sinfonie in A　KV114

(15歳　1771年12月30日　ザルツブルグで作曲)

Allegro moderato, Andante, Menuetto-Trio, Molto allegro

この作品は、第二次、第三次イタリア旅行にはさまれた、一年にも満たない期間にモーツァルトがザルツブルグのために書いた八つのシンフォニーの、第一曲目にあたる。この曲を機に、モーツァルトは憑かれたようにシンフォニーの作曲に励むのである。

この曲が生まれた背後には、なんらかの動機があったと考えられる。イタリア旅行は金銭的には何の利益ももたらされず、レーオポルトにとっても息子にとっても、本来の職務での信用を回復し負債を返却するために、自宅に落ち着ける時期がきていたのである。二人は、1711年12月15日にイタリアより帰国したが、その翌日、ザルツブルグ大司教ジムスムント・クリストフ・フォン・シュラッテンバッハが崩御した。KV114の自筆譜には、それから二週間後の日付が付けられている。服喪期間、派手な音をただす謝肉祭期間、四旬節のために、また3月の大司教就任式のために、シンフォニーは〔許容される音楽として〕ずっと必要とされたと思われる。加えてヴォルフガングは昇進を求めていた。

コンサートマスターという従来の称号が、実権のない、肩書きだけのものだったためである。熱意を示した結果、16歳の少年は1772年8月9日、大司教より、宮廷オーケストラの固定給メンバーの一員と認められた。ただし、年俸は、せいぜい150フローリンであった。

★参考文献　「モーツァルト最後の年」ロビンズ・ランドン著　「モーツァルト書簡全集」白水社
「モーツァルト大事典」ロビンズ・ランドン著　「モーツァルトのシンフォニー」ニール・ザスラウ著

コンスタンツェ・モーツァルト